

1.5人称の思考方法

今回テーマ「**アートを経験する**」

文◎鈴木郷史

text by Satoshi Suzuki

1954年静岡県生まれ。79年早大院理工修了。本田宗一郎氏に憧れて入った本田技術研究所を経て86年に現職ポーラ入社、00年社長。06年よりポーラ・オルビスHD社長。00年よりポーラ美術館を運営する公益財団法人、ポーラ美術振興財団理事長。

のアカデミズム依存を批判した。その後現代アートの登場によって、直観は作品そのものとなり、展示の方法も大きな変容を見せている。一方、19世紀・20世紀初頭の作品を見せる多くの美術館は依然として知識情報の提供、つまり作品を解体し、属性情報と方法論をもって作品の理

課題を概念図にしてみた。左側の情報の流れが一般化している展示方法、右側が検討すべきテーマとなる。アートは見る人によって異なる印象を与える、同じ人でも時間・場面が違えば同じ絵が違うものに見える。見る人自身の感受性を大事にして欲しいと願う。果たしてどんな展示方法になるのか、今後のポーラ美術館にご期待頂きたい。

私の叔父でコレクターであった鈴木常司の夢、美術館が箱根に開館したことが出来た。

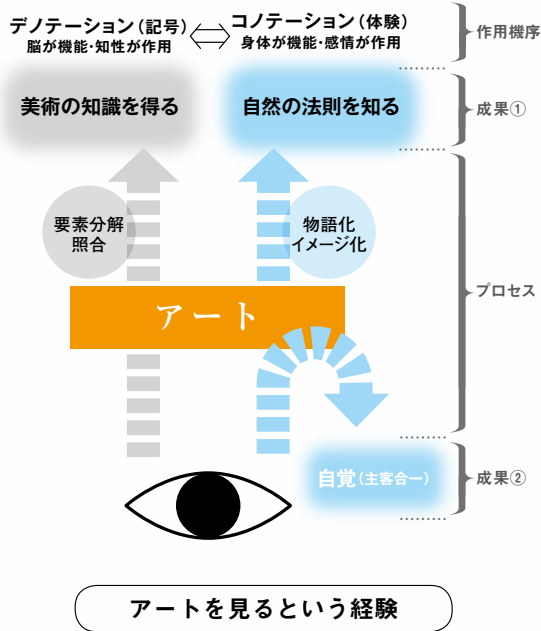
「身体美学・Somaesthetics」。ちょうどポーラ美術館におけるアートの展示方法を考案中で、博識多才なこの哲学者から多くの示唆を得ることが出来た。

今年の春、現代プラグマティストの雄・リチャード・シュスターマン教授が来日の折、私のオフィスにお呼びし少数で意見交換の場を設けることになった。彼の最近の研究テーマは「身体美学・Somaesthetics」。ちょうどポーラ美術館におけるアートの展示方法を考案中で、博識多才なこの哲学者から多くの示唆を得ることが出来た。

のが急逝して二年後の2002年。故人の遺志を継ぐ形で、その後の10年間は基本構想のままに運営をしてきたが、一定の評価を得たいまま、我々の美術館として変更を加えつつある。周辺の遊歩道を解放し、合わせて彫刻作品の設置を進めるなど、箱根の雪月風花を提供することで計画

当初に掲げたコンセプト「アートと自然の共生」が完成に近づきつつある。そしていよいよ展示方法にもある試みを施したいと考えている。

20世紀はじめベネデット・クロッチェは「アートは（作ることも見ることも）直観である」として、芸術



出合いは自己とだけでなく当然他者とも起きる。ある日、東京国立近代美術館に行った時だった。絵に見られている、と不思議な体験をしたことがある。それをきっかけにその作家、関根正二を知り、出身地である東北の美術館を訪問するなど、この弱冠二十歳で亡くなった作家と自分を何故か重ねてみていたのだ。シュスターマン教授の身体美学は正にこんな経験をする事、出合いのインターフェイスを担うアートの存在というものを示している。

解を促しているのが実態だろう。プラグマティズムの創始者・ウィリアム・ジェームスの影響を受けたといわれる西田幾多郎は「自己を自己の中に写すこと」によって無限に発展する創造的体系」と「自覚」を定義した。その自己を写す鏡としての機能をポーラコレクションに求めたいというのが私の考えである。